
遠距離女としつこい男

シュウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遠距離女としつこい男

【Zマーク】

Z7054Y

【作者名】

シユウ

【あらすじ】

遠距離恋愛中の女子高生につきまたしつこい男子高生の恋愛物語。女の子目線で話が進んでいきます。ちょっと変わったタイプ（？）の現代恋愛物語です。毎日更新していく予定でお届けします。

あなたが好きです

「好きですー愛してますー俺と付き合つてくださいーーー」

「断る」

「なんでーーー？」

「・・・何回フラれたら気が済むの？」

「君がOKを出してくれるまでさーーー」

はあ・・・ウザイ。

何回告白を断つてもすぐ立ち直つて告白してくれる。

こいつアルツハイマーかなんかなの？

「何回告白しても一緒に。私には付き合つて居るんだから諦めてちよつだい」

「しかしそいつとはもう半年以上も会つてないんだろ？だったら俺にもまだチャンスはあるつ！」

いやいや、堂々と「俺と浮気してくれーーー」宣言されても困るし。私には心に決めた人がいるのだ。
今は遠距離恋愛だから会えないだけで、心の底から愛していることを言える。

多分向こうもそう思つて居るはずだ。

「もうチャンスなんて無いから。何回告白しても結果は同じだから。私の考えは変わらないから。私用事あるから。バイバイ

しつかりと言い切つて後ろを振り向く。

背後で何か言つて居るが、気にしないで歩く。

「いつが私につきまとい始めたのは、三週間前のテストのあとの中学校帰りだ。

友達と別れて一人で歩いていた時。

「キミが吉野君子さん？」

「え？ はい。 そうですけど……どちら様ですか？」

「俺の名前は長谷川隆夫。 良かつたら俺と付き合つてくれないか？」

「……は？」

これが最初の告白だった。

私には遠距離恋愛している彼氏がいたので、申し訳ないと思いつつも丁重にお断りした。

しかしこれから毎日毎日学校帰りで一人になつたところを告白され続けた。

最初の1週間は告白されたのも初めてだったので、断るのにも少し罪悪感を感じていたけど、いつも毎日告白されてしまうのを続けていると罪悪感も何も感じなくなつて来る。

毎回同じ場所で告白されるもんだから、2週間目は違う道を通りみたけどやつぱりダメだった。

まるでストーカーのように私がいる道だけを選んで待ち伏せしている。

これはもう訴えたら勝てるレベル。

もしかしたらからだのどこかに発信機でも取り付けられているのかもしれない。

そして現在の3週間目。

もう違う道を通るのを諦めていつも道を通り、相手の精神をブッ壊すために全力で断り続けている。

しかしあいの精神力は底なしか？

何度断つても断つても学習していないかのようにつきまといつてくる。

もしかして機械で出来ていて、学習するAIを搭載し忘れたのだろうか？

それなら納得がいくが、そんな近未来の話がある訳がない。
私はリアリストだからそんな話は信じたくない。

「あ。忘れてた。メールしないと」

メールの相手はもちろん遠距離恋愛中の加藤正樹。
かとうまさき

同じ年の17才で事情があつて大阪へ転校してしまったのだ。

当時付き合っていた私と正樹は互いに別れるつもりはなくして、大人になつたら会う約束をして遠距離恋愛を続けている。

メールや時々する電話だけが私たちをつないでいるけれど、私達の気持ちはいつも目に見えない何かでつながっていると信じている。

きっと正樹も同じことを思つているはずだ。

そう思いながら私は正樹へメールを送つた。

あなたが好きです（後書き）

「」まで読んでいただきありがとうございました。

前の作品から読んでいただいている方は、いつもありがとうございます。

この作品から読んでいただいている方は、よろしくお願ひ致します。
なんやかんやでまた恋愛小説に落ち着きましたが、これからも拙い
文章ですがよろしくお願ひ致します。

では次回もお楽しみに！

私と正樹

私、吉野君子と加藤正樹が出会ったのは高1の2月。あまり友好の輪を広げない私の、唯一と言つてもいいこの学校での友達の照井明子が風邪で休んだ日のことだった。

明子以外に話す相手があまりいない私は授業と授業の間の休み時間中は、窓側の真ん中の席でボケーっと外を眺めていた。朝、明子にメールをしてみたけど寝ているのか、未だに返信はない。病気は寝て治すのが一番だとと思うから返信がないのは仕方がない。今は昼休み。例によつて、今も外を見ている。

「今日も雪がすごいや」

教室の中は暖房がついていてとても暖かいが、窓の外から見える風景は白一色だった。

今日はテレビの天気予報通りの猛吹雪である。いつもなら上から下に降つてくる雪も、風のせいで右から左へと流れている。

この調子だと帰りの電車は全く動いていないかもしがれない。いや、北海道のJRはこんなことじや遅れないか。

そんなことを考えながら窓の外を流れしていく雪を見ていた。

「あれ。キツネじゃない?」

ふと横から声をかけられた。

声がした方向を横目で確認してみると、窓の柵に手をついて外を見ている男子がいた。

「ほら。どうか行っちゃう

そう言われて私は慌てて視線を外に向かう。吹雪のため視界は激悪だが目を凝らして探す。

「どこ？」

「あの木の近く」

言われた木の近くを見てみると、確かに黄土色をしたキツネがいた。初めて見たわけじゃなくて中学校の時も時々見たことがあったけど、やはり見れると少し嬉しい。

私自身はこの学校に入つて初めて見た。

「俺今年初めて見た」

「私も」

「おーい正樹！ 次移動教室だぞ！」

「うわっ！ ちょっと待つてくれよ！ ってわけで移動教室だから。 吉野さん。 遅れたらダメだよ」

そう言つて友達のとこへ戻つていく男子。

どうやらボケーっとしていた私に移動教室のことを伝えに来てくれたらしい。

すっかり忘れていたけど次は理科室で実験をするんだつた。いつもなら明子が教えてくれるんだけど今日は居ない。

彼が来てくれなければ、私は授業開始のチャイムが鳴つてから慌てて移動することになつただろう。ありがたき幸せ。

それにしても全然話したこともないただの同じクラスの女子に話しかけてくるなんて珍しい人だ。

理科室に向かいながらさつきの男子生徒について考える。

同じクラスなんだろうけど名前が・・・たしか『正樹』って呼ばれる

てたよくな気がする。

私は名前を覚えるのが苦手だった。

「あの、 セイはありますか？」

今田最後の授業の前の休み時間。私は彼にさつきのお礼を言った。私の席は窓側の真ん中ぐらいの席で、彼の席は廊下側の一番後ろの席だった。

「わざわざお礼? 別にいいの?」

笑いながら、じつこたしまして、と囁ひ声で彼。

「だつて・・・えーと・・・」

「ん?」

彼が不思議そうな顔をする。

「じめん。名前聞いてもいい?」

「え・・・ 加藤です」

そりや驚くわな。

「ほぼ一年間一緒に過ごしてきたクラスメイトの名前もわからないなんてどうかしてみると自分でも思つた。

「もしかして名前覚えてなかつたの?」

「じめん。私あんまり話さないから」

「いや、いいんだけじゃ。でもなんかちょっとシヨック……」

あからさまに肩を落とす加藤君。
なんか……ほんとに申し訳ない。

「あ。冗談冗談……吉野さんは気にしないで！」
「なんで私の名前？」
「これが普通だと思つんだけどなあ」
「私の普通とは……私がズレてるのね」
「かもね」

加藤君はそう言つて笑つた。

「これからもたまに話しかけてもいい？」
「加藤君がいいなら私はかまわないけど」
「ほんと!? 良かったー。なんか吉野さんってちょっと近寄りがた
い感じだったから断られたらどうしようつつかと思つた」
「そんなに近寄りがたい？」

ちょっとシヨックだつた。

普通に過ごしてゐるだけなのに。

いや、私の普通はズれてるんだつけ。

「ちょっとね。照井さん以外と話してるのは見たことなかつたし、
それ以外は頬杖ついて外見てるだけだつたし」
「だつて明子しか友達いないもの」
「そつなんだ……じゃあ僕と友達になつてよ」
「そこは契や……いや、なんでもない。別にいいけど、友達にな
つてどうするの?」

明子とは共通の話題があるからまだわかるけど、彼は特になにも接点がない。

「仲良くなるつよ。せっかく同じクラスなんだし」

「まあそれもいいかもね。ようじく、加藤君」

「ひらひらそよろしく、町野さん」

これが私と正樹のファーストコンタクトだった。

私と正樹（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました。
感想とか書いていただけすると執筆意欲が高まります。

初めは結構のんびり進めていきます。
気長にお付き合いくださいます。

次回もお楽しみに！

学年が変わり、高校2年の4月。

学年が上がる際のクラス替えがあつたけど、私は明子と同じクラスになれた。

加藤君とも同じクラスだ

加藤君とは暗号ほどではないけれどそれなりに新しい関係になってしまって、連絡先を交換したり私の趣味を打ち明ける程度の仲にはなつていた。

明子と友達になつた時は

「ねえ吉野さん」

「何」といふか誰(?)

に付いてるのって……

「ええ。ムモ子、

「へえ。ちょっと意外かも

— それのどんなどころが好き?」

そんな感じで明子とは仲良くなつた。

でも不外観であることは一人とも隠していなかった。

られていた。

のを見ると、あんなのと一緒にされたくない気持ちが芽生えた。

どうしてあいゆーたちはオタクアヒールをするのだろう？

いるように見えて仕方がなかつた。

そんなこともあるせいか加藤君にも隠していたんだけど、これからも友達でいるためには話しておかなければいけないと思いつれとなく話してみた。

「私オタクなんだ」

「へえー。 そうなんだ」

「・・・それだけ?」

「え? なんかごめん。 突つ込んだほうがよかつた?」

「いや、 なんていうか、 オタクだよ?」

「えーと・・・別にいいんじゃない? 個性だよ。 個性

全然気にしてなかつた。
むしろ喜んでた。

「これって僕しか知らないの?」

「まあ明子は知ってるけど」

「じゃあ男子では僕だけ?」

「まあ そうなるね」

「Hへへ」

なんかよくわからぬいけど、 軽蔑されたりしなくて良かつたと思つた。

オタクのことを知つても全然態度が変わらなくて良かつた。

加藤君はわりと誰とでも話すみたいで友達も多かつた。

話しかけられても嫌な顔一つしないで楽しそうに話していた。

今回もクラス替えがあつた直後なのに、 クラスのほとんどの人の名前を覚えていた。

今も明子と三人でその話をしていた。

「え？ 普通じゃないの？」

「加藤君のいう普通ってハードル高くない？ ハードルってゆーか棒

高飛びの域なんだけど」

「照井さんはもう覚えてるでしょ？」

「名前は自然と頭に入していくものですよ。加藤君や

「つまりどういうこと？」

「まだ覚えてないってこと。で、君子きみこは？」

「私に聞いちゃうの？」

「「ですよねー」」

三人で笑った。

こんな日が続くと思つてた。

「アンタ最近調子乗つてない？」

ある日、トイレに行つた明子を見送つた教室で同じクラスの女子何かが私の席へ来て言った。

もちろん名前は覚えてない。

加藤君は他の友達とどこかに行つていた。

私は意味が分からず聞き返す。

「調子に乗つてるつて？」

「最近アンタ正樹君と仲良いみたいじゃん。それが調子乗つてるつて言つんだよ」

「それがどうかしたの？」

「そーゆー態度がムカツクんだよー！」

ガンツと机を蹴る。

その音にビクッとなつて教室にいた人たちの視線が私の席に集まる。しかしそれも一瞬で、みんな視線をすぐにそらす。

私は思った。

これがイジメつてやつか。

実際に自分が当事者になるなんて思つてなかつたから全然実感がなかつた。

でも現に今、明子も加藤君もいないタイミング、つまり私が一人の時に狙つてきただつことはそーゆーことだらう。からだはいつもよりもぎこちない動きをしているけど頭は冷静だつた。

「なんか言えよ」

「私と加藤君はただの友達・・・」

「アンタに無理矢理合わせてるだけだつての。それぐらい氣づけよ」

最後まで言わせずに連れの女子が笑う。

「とにかく調子に乗りすぎんな。次は無いからな」

「君子?」

明子が教室に戻つてきた。

それを確認すると女子達は去つていぐ。少しホッとした。

「どうしたの?なんかあつた?」

「ううん。ちょっと話してただけ」

「せう?ならいいけど」

教室の異様な空気に気づいて明子が心配してくれたのに、私は「まかしてしまつた。

それが全ての始まりだつた。

友達（後書き）

「」まで読んでいただきありがとうございました。
感想とか書いていただけすると執筆意欲が高まります。

しばらく鬱鬱展開が続きますが、あと数話の辛抱です。
お付き合いください。

今回は勢いだけじゃないんだからね！
ちゃんとラブコメにしてやるんだからね！

とこり」と次回もお楽しみに！

あの日を境に私はやたらと絡まれるようになつた。

一人の時に悪口を言われるのは当たり前で、すれ違いざまに足をかけられたり、上靴が片方だけ全然違うところにあつたり、机の中に入画ビヨウが大量に入つていたりもした。

全部挙げるとキリがないけど、全部私が誤魔化せば隠せる範囲のイタズラだつた。

しかし私は明子や加藤君に迷惑をかけたくなかったので隠し続けた。明子も私と同じで学校には友達が居なかつた（学校外にはいるらしい）から一緒にいることが多かつたけど、それでも少しだけ明子が離れるタイミングを見計らつてやられていた。

それでも私は明子にバレないようにしていた。

陰湿なイジメが始まつて1ヶ月が経とうとしていた。

「君子。大丈夫？」

「え？ 何が？」

「何がつて・・・なんか最近ビクビクしてない？」

ドキッとした。

できるだけバレないようにしていたのに無意識のうちに態度に出てしまつっていたようだ。

「そんなことないよ。多分昨日見たテレビが怖かつたからかも」

「そう？ ならないんだけど。なんかあつたら言つてね」

そんなんある日。

机の中に手紙が入っていた。

私は一人に気づかれないように恐る恐る開いてみた。

『今日の放課後、校舎裏に来い。来なければ照井にバラす』

校舎裏には学校の中からも、グラウンドからも全くの死角になっている場所がある。

多分そこに来いということだらう。

私は放課後、明子に適当な嘘をついて指示通りに校舎裏に行つた。

明子にも加藤君にも迷惑はかけられない。

私が校舎裏についた時には誰もいなかつた。

それから10分ぐらい待つた。

コツコツとローファーがコンクリートの地面を鳴らす音が聞こえてきた。

だんだん近づいてくる。

ついに私の視界に3人が入つた。

「うわ。ホントにいるし」

「何の用?」

「勝手にしゃべるな!」

言いながら一人が蹴つてきた。

私は避けることができずに、そのまま左足に受けて膝を付く。

「お前な。いい加減にしろよ?私たちが忠告してやつてるんだから大人しくしてろよ」

「だからただの友達・・・」

「しゃべるなって言つてるだろ!」

また私を蹴つてきた。

今度は一発だけじゃなくて一発、二発と続けて蹴る。

私はついに耐え切れなくなつてその場に倒れる。

「なんかむかついてきた。お前の髪つて私の髪型をかぶつてるんだよな」

「たしかに！」

「ねえ切つちゃおうよ。ほらハサミもあるし」

「準備いいなあ。よし。これから散髪してやるよ」

ハサミを持つていない一人が私を無理矢理起こし、両腕を押さえて壁に立たせる。

「ちやんと押さえとけよ」

髪の毛にハサミが近づいてくる。

髪で済むなら安いもんだと思った。

きつと切つたら満足してイジメが終わるかもしれない。

そう考えていた。

しかし現実はそんなに甘くなかった。

腕を押さえていた一人が言つた。

「こいつの制服切つちゃえばもう学校来ないんじゃね？」

「たしかに」

「お前頭いいな。じゃあ散髪から制服の裁断にするか」

髪の毛に迫つていたハサミは方向を変えて、スカートの裾へと向かつていた。

制服を切られたらバレちゃう！

親にも隠してるので！

私は必死に抵抗した。

「！」じつ急に暴れやがつて！

「おとなしくしろ！」

両腕を押さえられながらも必死に抵抗する私。
しかしハサミは止まらない。

ついにはスカートを手で押さえながらハサミを入れてくる。

「何やつてる！」

その声に反応して全員が声のした方向に目を向けた。
ハサミを持った女の後ろに加藤君が見えた。

「加藤君・・・」

「吉野さんーー？」

驚いて目を丸くする加藤君。

三人はハサミを後ろ手に隠すと、何もなかつたかのように私を開放した。

「・・・何してるの？」

「・・・」

私は答えられない。

「私たちと遊んでたんだよ。なあ？」

「そうそうー！」

「たしかに！」

三人は口々に言った。

「 さうなの？ 吉野さん？」

何も言えずにただ立っているだけの私。

「 吉野さん。 」 うちに来て。 一緒に帰ろう? 」

フルフルを首を振る。

「 ねえ。 正樹くん。 もうこんなやつに関わるのやめなよ

一人が言った。

「 どうして? 」

「 だってこんな根暗で地味なやつと、 正樹くんみたいな元気な人は
関わっちゃいけないとと思うんだ」

「 たしかに」

「 私もそう思う! 」

「 でも僕は吉野さんの友達だし」

「 友達って・・・私たちは友達じゃないの? 」

「 友達だけど、 吉野さんも友達だから」

「 じゃあ私たちと吉野さんならどっちを選ぶの? 」

私のほうを見てくる加藤君。

「 吉野・・・さんかな」

「 加藤君・・・」

途端にしおれた様子になる三人。

「わかった。こいつのことが好きなんでしょうー。」

ハサミを持っていた女が叫んだ。

他の一人も驚いている。

私はドキッとした。

「・・・うん」

「え・・・」

加藤君は私を見ながら頷いた。

「マジかよ・・・帰る」

「ちょっと待てよー置いてくなよー。」

「たしかに！」

そう言って三人は加藤君の横を通り去っていった。

イジメ（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました。
感想とか書いていただけすると興奮します。

一応次で過去編が終了します。

今のところ君子線でお送りしていますが、真の主人公は最初に出てきたあの男ですからね。
期待していくください。

では次回もお楽しみに！

私と加藤君はその後のなりゆきで付き合いになりました。
つて言つても、加藤君はみんなに内緒にしておいて欲しいらしく、
まだ誰にも言つてない。

もちろん明子にも。

そしてその次の日からイジメは無くなつた。
というよりも今まで以上に加藤君が近くにいるようになつたので、
イジメができなくなつたと言つ感じだつた。

そして私と加藤君が内緒で付き合い初めて1ヶ月ぐらいが経ち、6
月も終わりに近づいてきたある日。

その頃には、二人の時は互いに名前で呼び合つていた。
明子が掃除当番で遅くなるので、学校帰りの駅までの道を一人で歩
いていた時だつた。

「え？ 転校？」

正樹が大阪へ転校するということを聞かされた。

転校は前から決まつていて、夏休みには引っ越してしまつらしき。

「そりなんだ・・・」

「ごめんね。なかなか言い出せなくて」

「ううん。私たちはどうなるの？」

「どうしたい？」

そう聞かれると困る。

私は遠距離でもなんでもいいから正樹との関係を続けたかった。

「遠距離とか・・・ダメかな?」

正樹が迷惑ならと思つたけど聞いてみる。

「遠距離つてつらじよ?なかなか会えないし、何かあつてもすぐに行けないし」

「でも気持ちがつながつていれば大丈夫だよー」

「・・・そうだね。じゃあまた大人になつたら会おうー。」

そう約束した。

そして正樹は7月の終業式の次の日には引っ越していった。
私と明子は一人で空港まで見送りにいった。

「見送りなんていいのに」

すこし照れたように微笑む正樹。

「そんなこと言わないでよ。最後かもしれないんだから」

「それフラグ」

明子が縁起でもないとを言つ。

「アハハハ。じゃあね。照井さんも君子も元気でね」

「うん。メールとかするね」

「加藤君も頑張れよー!」

搭乗口へと姿を消していく正樹君を見送つた。

その帰りの電車の中。

「君子と加藤君つて付き合つてたんでしょ？」

「え！？ なんで知つてるの！？」

「そんなのバレバレだよ。見てたらわかるって」

「バレてたのか・・・」

テヘヘと頭をポリポリとかく。

「さみしくないの？」

「そんなこと・・・ないよ・・・」

しばらく正樹に会えないと思つと涙が溢れてきた。

「ほひ。俺の胸を貸してやるよ」

「誰それ・・・」

明子の冗談にツッコミを入れて乗り換える駅まで私はずっと泣いていた。

そして今、高校3年の5月。

正樹とはあれ以来ずっと会つていなければ、心が通じ合つていると信じて遠距離恋愛を続けている。

最初のうちはどうしようもなく会いたくなつたけど、そういう時は正樹に電話をしたりして気を落ち着けていた。

こんなに会えないのが辛いものだとは思つていなかつた。

会えない。触れない。声が聞けない。顔が見れない。

そんなこと愛があれば何とでもなると思つていたけど、正直会いに

いきたい。

でも約束は約束だ。

いつか大人になつたら会つその日まで、頑張つて人生を過ごしてやる。

「俺と付き合いませんか！？」

「断るつ！！！」

こいつも振つて振つて振りまくつてやる！..

転校（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました。
感想とか書いていただけすると執筆意欲が高まります。

やっと過去編が終わりました。
次回からはストーカー編です。

次回もお楽しみに！

ストーカー

変な男を振り続ける生活を続けて、現在6月。5月のGWの休み明けから付きまとわれていたから、かれこれ1ヶ月になる。

「付き合ってくれ！」

「断る！何回言わせるの…？」

「何回でもや…！」

もつホントにこりないやつ…。

「なら聞くけど、私のどこが好きなの？」

「どこって言われたら困るんだが…・・・全部だ！」

「はいダメー！」

「なんでだよ…！」

「全部つてことは曖昧すぎるから」

「謀つたなー！シャア！」

「君の父上がいけないのだよ。つて何言わせるんだー…とりあえずダメだ！」

振り向いて帰る。

なんか調子狂うな。

あの人、私のオタクネタのツボをじどじとくついてくる。やれやれだぜ。

家に帰つてメールを送る。

最近正樹は忙しいらしく、メールはたまにしか返つてこない。でも私と正樹は心が通じ合つているから問題ない。

次の日の朝。

「最近加藤君とどう?」

隣の席に座っていた明子が声をかけてきた。

明子とは3年になつても同じクラスで、しかも今は席が隣同士だ。

「なんか忙しいみたいであんまり連絡とつてないかな」

「ふーん。じゃああの変な奴は?」

「あいつは相変わらずつきまとつてくるよ。ホント勘弁して欲しいよ。こないだもガンダムネタで攻めてきて、思わず乗っちゃつたもん」

「マジで? すごいなー。そこまで的確に君子の趣味を突いてくるとはなかなかやるな。ゲルググと名付けようか」

「なんでゲルググ! でもホントに的確なんだよねー。どっかで会つてるのかなあ?」

「私に聞かれても困るわ」

「だよねー」

「よーし席つけー」

「あ、先生だ」

先生が來たので会話を中断して授業に集中した。

そして放課後。

「アナタノ「トガ一好キダカラ一!」

「・・・・・・・・」

「ちよつと一無視! ? 無視は勘弁してください!」

「もう何回来れば気が済むの？」

「あなたが僕の気持ちに答えてくれるまでです」

片膝をついて手を差し伸べてくれる。

「だが断る」

その手をバシッと払つて歩き出す。

「断らないでよー加藤よりも俺のほうが絶対にいいってー！」

思わず止まつた。

ピタッ。

「どうして正樹を知つてるの？」

「あ・・・いや、その・・・」

「そんなことまで調べてるの？サイテー」

後ろで何か言つているが無視して歩き出す。

ただのストーカー気味の男だと思つてたのに、ホントのストーカーでしかも正樹のことを悪く言つなんて許せない。

次の日。

ストーカー男は現れなかつた。

ついに観念して告白するのをやめたのか。

長かつた。やっぱり昨日の一言が決定的だつたんだと思つた。
我ながらすうじい冷たい声で言つたと思う。

あんなやつに同情なんてする価値も無い。

そのまた次の日。

またストーカー男は現れなかつた。

更に一週間。

あれから一度もストーカー男は現れなかつた。
私にとってはこれが普通なんだろ?けど、少し罪悪感を感じた。
いや、ホントに少しだけだよ?『クロン』ぐらいでよ?
この話を明子に話した。

「いいことじやないか」

「そりなんんだけど・・・」

「なになに? もしかしてもしかしてちょっとせみしきの?」

「そ、そんなことないよ!」

「必死になるところがまた怪しいで『J』やる」

「ちょっとからかわないのでよーーー」

別に異常から通常に戻つただけなんだから問題ないはずだ。
それに私には正樹が・・・

「正樹・・・何してるんだろう・・・」

あの男のせいで忘れてたけど、ここ最近正樹から連絡がないんだつ

た。

電話は無理でもメールぐらいくれたらいいのに。

まあ今年は受験もあるから授業とか大変なのはわかるんだけどちよ

つともみしいなあ・・・

ストーカー（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とかいただけすると発狂します。
ここまでテンプレ。

こんなストーカーなら楽しそうですね。

次回もお楽しみに！

ストーカー男が居なくなつてから丸一週間。

一つの厄介だつた問題が解消された私は、正樹のことで頭がいつぱいになりつつあつた。

どうして電話くれないの？

どうしてメールの返事をくれないの？

今なにしてるの？

時々ひどくなると、夜に勉強をしていて泣き出しちゃひほじだつた。

「でも正樹と私は・・・」

本当に正樹と私は心が繋がつているの？

そんなことまで考えてしまう私はダメな子だ。

あの時私のことを助けてくれたんだから、今度は私が頑張らなきゃ。
我慢我慢！

「君子・・・大丈夫？」

ある日の朝、学校で明子に言われた。

「あんた泣いたでしょ？」

「なんでわかるの？」

「だつて田の周り真っ赤だよ。なんか辛いことあつた？」

「まあ・・・ちょっとね」

「私で良ければ話聞くよ」

私は明子に甘えて話を聞いてもらつたとした。

いい友達を持ったと思った。

そして放課後。

いつもの帰り道とは少しそれたところにある、公園の「ブランコ」
人で腰掛けた。

通学路とは少し離れているから、他の人が来ることはない。
私は正樹のことについて色々話した。

「もしかしてだけど、加藤君つてもつ別れたいんじゃない？」

「やつぱりそう思う？」

私も少し思っていた。

「でも連絡ぐらいしてくれてもいいのにね。と私は思つたが、君子
から電話はしたの？」

「しない。なんか怖くて」

「そりや怖いかもしれないけど、そのままズルズル引きずつっていく
よりはいいと思うけどなあ」

「うん・・・」

明子はブランコをこぎながら私の返事を待っている。
でも私はなかなか踏ん切りがつかなかつた。

正樹のことはすこい好きだ。

それに正樹がホントに忙しいから連絡できないのかもしれない。
でもいくらなんでもこれはおかしい。

もしかしたら事故にあって連絡ができないのかもしれない。
でもだからといって電話ぐらいは使えるはずだ。
いろんなことを頭で考えてしまつ。

これが遠距離恋愛なのだ。

相手からの情報がないとなにもわからなくなつて、結局自分自身で

解決せざるを得なくなつて、どんどん悪い方向へと考えてしまつ。

「明子……私がしたらいいんだらう……」
「君子……」

答えを待つていたはずの明子も、私の表情を見て返す言葉がなくなつてしまつたようだ。

「なら俺に任せてくれないか！」

突然、公園の中に声が響いた。

何事かと思つて公園の入口を見てみると、あのストーカー男が立つていた。

「何あれ？」

「えーと、照井明子さんだつたかな？はじめまして。長谷川隆夫と言います」

「あ。」「寧にどうも」

「おじぎしないでよ！明子！あいつが例のストーカーよ……」「なんと…やつぱり変態紳士つていたんだ！」

変なところに驚いている明子を横目に、ストーカーに声をかける。

「なんの用？」
「そんな冷たい目で見ないでくれ
「明子。帰りましょ」
「だから無視はやめてつて！」「なんか言つてるけどいいの？」
「いいのよ。いつものことだから。帰りましょ」

「加藤の話だる?」

唐突に話を戻すストーカー。

「まさか立ち聞きしてたの?」

「違ひ。うちはそこだ」

彼の指さした方向を見ると、公園の周りを取り囲むような形で生えている木の隙間から家が見える。

あそこからならこここの公園はばっちり見えるわけだ。

「たまたま窓の外を見たら、ブランコにすくしゃんぼりした吉野君子がとお友達が座っているではないか。こんなにしゃんぼりさせるのは加藤のやつしかいないと思った。そして家から出てきて今まで至るというわけだ」

「説明?。つまりあんたは加藤君について何か知っているとこう」と?。」

「まさにそのとおりだ」

自信満々に胸を張るストーカー男。

ホントに大丈夫なのだろうか?

公園（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました。
感想とか書いていただけると執筆意欲が高まります。

次回もお楽しみに！

眞実

「じゃあまずはウチにくるか？」

「行かない。ここで聞く」

「さいですか」

なぜかしょんぼりするストーカー。
すぐに背筋を伸ばして気を取り直して話し始めた。

「俺には大阪に友達がいるんだ。この間のGWにその友達が大阪案内をしてくれるので、飛行機に乗つて行ってきたんだ」

急にストーカーの大阪旅行記が始まってしまい、私と明子は顔を見合せた。
アイコンタクトの結果、何か意図があるのでどうといくことで大人しく聞いていた。

「……で、そんなこんなで大阪に着いた俺は、空港で待つてくれた友達と一緒に観光して一日目を友達の家に泊まった」「これちゃんと正樹に関係あるんでしょうね？」

「まあのんびり聞いててくれ。そして次の日だ。友達が紹介したいやつがいるって言うから、一緒にそいつと待ち合せている駅まで行つたんだ。なんでも去年の夏休み明けに転校してきて、俺の友達と仲良くなつたらしい」

「夏休み明けつて……」

「そうだ。そいつが加藤だつた。加藤はすごい馴染みやすいやつで俺とも仲良くなつた。そして俺たちはまた観光……というよりも道頓堀に遊びに行つた。さんざん遊んだあとに夕食をファミレスで食べてたんだ」

「で、長谷川君は北海道からわざわざ来たの？」
「まあな。こいつが観光案内してくれるって言つからな。飛行機代
だけで良いっていうからこいつの家に泊まつた」
「まあ最終日に全額請求するけどな」
「お前鬼か！」
「僕も北海道出身なんだよー」
「へえーそうなのか。どこいらへん？」
「えーと札幌の端っこらへん」
「マジで？僕もそっちの方だ」
「ホント！？もしかして学校も一緒だつたりして」
「俺は相野高校あいのこうこうだ」
「うそ！同じじやん！」
「マジでか！？何組！？」
「9組」
「あーなら仕方ないよな。俺1組」
「あー反対側だもんねー。そりや会わないかもねー」
「そういうこいつ彼女置いてきたらじいぜ」
「だから彼女じゃないつてば」
「どういふことだ？」
「ほら。話してやれ」
「わかつたつてば。いじめてるところを助けたら勢いで付き合つち
やつた彼女がいたんだ。でもその時には転校も決まってたし、それ
までなら別にいいかなーって思つて付き合つてたんだ。で、その転
校するつて言つた時に遠距離でもいいつて言われちゃつて。僕はそ
んな気はなかつたんだけど、向こうは別れる気はなかつたみたいで。
。。で毎日のようにメールがくるんだけど、最近はもう返事も返
してないかな」

「お、お前はそいつのこと好きじゃないのか?」

「もともと友達以上ではなかつたよ。助けたのだつてたまたまだし。友達が困つてたら助けちゃうでしょ?」

「まあ確かにそうだが・・・なんて子なんだ?」

「同じ9組の・・・つて今は多分違つけど。吉野君子つて知つてゐ?」

「いや、知らない」

「こんなこと言わないでよ。これは僕たちの秘密だからね?今だから言える~的なやつだよ」

「もちろんだよ!な。隆夫?」

「も、もちろんだ」

一通り話したストーカーがこちらへと田を向けた。話しながらジエスチャーも加えていたのに、なぜかわかりにくかつた。

でも正樹のことだけはちゃんとわかつた。

「正樹はわたしのことなんとも思つてなかつたんだ・・・」

「君子・・・」

「・・・私なにしてるんだ?」

「まあこつちに戻つて来て、早速吉野君子を探したんだ。顔がわからぬいやつを探すのは大変だつた」

「ならなんであんたがストーカーまがいのことをしてたのよ

君子がストーカーに向かつて言つ。

「少しでも加藤のことを忘れてほしくてな。俺は不器用だからそんな方法しか思い付かなかつたんだ。吉野君子を見つけた時、すごいつらそうな顔をしていたのを覚えてる」

見すきじゃない?とも思ったけど、そんな軽口を叩けるような心情ではなかつた。

「だから俺は変なやつを演じる」と西野君子につきまとつたんだ」「あんたいいやつだな」

「まあ困つてゐやつがいたらまつておけないんだ。それに迷惑をかけたのは事実だ。すまなかつた」

「いやいや、あんたは悪くないよ。むしろ感謝すべきだ」

明子とストーカーの一人で話が進んでいく。
正樹がホントにそんなこと言つたの?
信じられない。

私は正樹のことが好きだったのに・・・
私の気持ちはどうなるの?

「・・・嘘でしょ?」

「え?」

「嘘なんでしょ?正樹がそんなこと言つわけないもん。ねえ、あなたが勝手に作った話なんでしょ?」

ストーカーの肩をつかんで前後に揺らす。

「残念だが真実だ」

眞実（後書き）

「」まで読んでいただきありがとうございました。
感想とか書いていただけすると興奮します。

だんだんと話が暗くなつてきました。

とこり」と次回もお楽しみにー。

ぐわぐわした気持ち

残酷な真実を呑きつけられた私は、いつのまにか家で寝ていた。
どうやって帰ったかもわからないぐらいい記憶がぐわぐわになつ
ていた。

もしかして全部夢だつたのかなあ？

そう思つてケータイを開いてみると、返事が返ってきていないメー
ルの履歴。

それだけで現実に引き戻される。

また悲しくなる。

必死にあの話を嘘だと信じたい自分がいるのだが、現状を見る限り
では真実を受け止めるしかないような気がしてくる。

信じたくないのに信じるしかない。

正樹を信じている自分を信じたいのに、信じれる要素がない。

こんなに遠距離恋愛が辛いものだとは思わなかつた。

もし遠距離じやなければ、今すぐ会いに行つて事情を聞けるのに・・

・

話を聞きたい。声が聞きたい。本当のことを聞きたい。

片方が拒否するだけで全部できない。

心どころかケータイすらつながらつてないじやないか。

「こんなおもちゃなんかつーーー！」

壁に向かつて思いつきケータイを投げつけた。

開いたまま投げたせいで変なぶつかり方をし、上下を繋ぐ部分が壊
れて綺麗に一つになつた。

一瞬やつてしまつた、とも思つたけど、どうせ連絡も来ないんだし
もう私には必要なかつた。

制服を着たまま布団の中に潜り込んだ。

次の日。

朝になつてお母さんが起こしに来たけど、頭が痛いと嘘をついて学校を休んだ。

両親は共働きのため、昼間は誰も家にいなかつた。

静かな家の中でその日は布団の中に潜つて、一日中沈んだ気分のまま過ごした。

その次の日。

また嘘をついて休んだ。

お母さんは病院に行くよつと言つたけど、寝てれば治ると言つてまた布団の中で過ごした。

そのまた次の日。

土曜日のため学校は休みだつた。

お母さんが朝に様子をみに来たけど、また仮病を使って布団に引きこもつた。

だんだんと気持ちが収まつてきたけど、なんとなく布団から出たくなかつた。

「お姉ちゃん大丈夫?」

顔を向けると、中学1年の妹の一美^{かずみ}がドアから部屋をのぞき込んでいた。

この間まで小学生だったのに、今はもう中学生だ。
時が経つのは早いなあ。

「大丈夫だよ」

「あのね。明子さんからメールがきて、お姉ちゃんのケータイに繋がらないから様子を見てくれって言われたの」

明子と一美はメールアドレスを交換している。

無理矢理明子が聞いたんだけどね。

リアル妹がほしかつたらしい。

「ごめんね。大丈夫って言つといて」

「わかった。お姉ちゃんのケータイは？」

そういうえば壊れたんだっけ。

「あれ？ それ・・・ケータイ壊れたの？」

「あっ！」

一美があざとく床に落ちたケータイを見つけて拾い上げる。
慌てて布団から出てケータイを取り返そうと立ち上がるが、近頃の布団生活のせいでからだがバキバキいって動きにくくて一美までたどり着けない。

「お姉ちゃん・・・大丈夫？」
「ちょっと返して・・・」
「そんなことよりヒドイ顔だよ？」
「・・・マイクしてないからさ」
「お姉ちゃんマイクしないじゃん。お母さん呼んでこようか？」
「大丈夫だからーお母さんには言わないで！」

つい大声を出してしまつた。

「……わかつた。なんかあつたら言つてよね。私たち姉妹なんだ
し」

「……うん。ありがと」

ケータイを私の手に置くと、一美は部屋から出していった。
話のわかる妹でよかつた。
昔から小さくせに空氣の読める妹だった。
田舎の妹だ。

「はあ……どうしよ」

わづれだけ休んだりしてると部屋から出でへくなつちやつたなあ。
きっと明子も心配してゐみたいだし。
そろそろ学校にも行かないといつて思つけど、正樹のことを考えると
すこし辛くなつてくる。

「お姉ちゃん」

閉じたドアの向こうから一美の声がした。

「何？」
「これから明子さんたちが来るつて」
「え？ 明子に言つたの？」
「何も言つてないよ。言つたらお姉ちゃん怒るでしょ？」
「そつか。ごめん」
「別にいいよ。明子さんから伝言。私が行くまでに風呂に入つたり
歯磨いたりとかしどけ！ だつて」

「・・・わかった。ありがとう」

私はシャワーに入つて歯を磨いてさつぱりした。

そしたらお腹が減つてきて台所で冷蔵庫を漁るつと/or> していたら、お母さんがおにぎりを作つてくれた。

それを部屋に持つていき、明子が来るまで食べながら待つていた。しばらくしてインターホンが鳴つた。

妹が出たらしく、部屋まで明子を案内してくれた。

「なんであんたもいるの？」

私の部屋の前にいたのは、明子だけじゃなくてストーカー男も一緒だった。

「あのあと氣になつてたんだが、吉野君子がなかなか学校に来ないから困つていたんだ」

「だから今日お見舞いついでに連れてきたの」

「一応女子高生の部屋なんだけど・・・」

「大丈夫だ。俺は氣にしない」

「私が気にするつづーの!!」

ぐわぐわした気持ち（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

感想とかいただけすると見えないとこで激しく踊り狂います。

なんか沢山書いてる気がするんですがまだ一桁話なんですねー
多分そろそろ鬱ターンが終わるはずです。

なんかデジャブ・・・

次回もお楽しみにーー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7054y/>

遠距離女としつこい男

2011年11月27日12時46分発行